

福井県立若狭歴史民俗資料館 企画展

サバ街道

—日本海と都をむすぶ道—

平成2年6月19日～7月15日



▲ 和紙人形 サバ街道

ごあいさつ

福井県立若狭歴史民俗資料館長 山本和夫

鯖街道さばかいどうとは、若狭から京都へと海の幸を運んだ街道のことです。誰が名付けたというわけではなく、グルメ族の舌の先から自然に生れた愛称だと思います。

南下するリマン寒流と、北上する対馬暖流とが、日本海に突き出した能登半島に拒まれて渦を巻き、その渦の中の北のプランクトンと南のプランクトンを飽食した海の幸は、都のグルメ族の垂涎すいぜんの的でした。

この海の幸を、鯖が代表したのは、朝ひと塩してかついでいけば、京の翌日の夕食に間にあい、しかも、ちょうど食べごろとなって、美味しく香っていて、貴族にも庶民にも、万べんなく愛された故でしょうか。

鯖街道から運ばれた海の幸は、旗亭かたがひには若狭鯨、若狭小鯛、高級料亭には若狭鯛の浜焼、また鯖寿司と、毛筆のメニューに美しく書かれ、居酒屋では、わかさいわし、わかさあじと、稚拙なひらかなど変わり、一せん飯屋いっせんの軒先には、三方湖のうなぎがかおり、季節に応じてグルメ族をふるこばせました。

現在でも、京の人は、五月の葵祭あおいまつりには、鯖寿司を賞味しています。

鯖街道という、なんて美味しい名を、若狭街道は与えられたのでしょうか。うれしくなります。名を聞いただけで、一ぱいやりたくなります。

ところで、わが若狭街道は、海の幸のみを運ぶ街道ではありませんでした。中国、朝鮮、シベリア、そしてまた、南方の海からの文化を、日本の基礎を潤す文化を、都へ運んだ街道だったことを忘れてはなりません。

この催しに際し、色々とお世話になり、ご教示いただきました各位に、深く御礼申し上げます。

出品目録

No	資 料	頁数	所有者または提供者(敬称略)
	御食国若狭		
1	平城京跡出土木簡(複製)	4	当館蔵
2	藤原京跡出土木簡(複製)	2	〃
3	平城京跡出土木簡・木津郷貽貝鮓(写真)	1	奈良国立文化財研究所 蔵 毎日新聞社 写真提供
	若狭街道		
4	小浜魚市場仲間仲買文書 江戸時代	2冊	小浜市 藤田昭三 蔵
5	稚狭考 江戸時代・写本	5冊	〃 高森宏 蔵
6	小浜漁港サバの水揚げ 昭和10年代(写真)	1	〃 伊藤一樹 提供
7	大手橋を渡る魚売り 昭和初期(〃)	1	〃 井田米井 提供
8	阿納坂越えの魚売り 昭和20年代(〃)	1	〃 伊藤一樹 提供
9	大正ごろの若狭街道 上中町飯屋附近(〃)	1	上中町 逸見源右衛門 提供
10	川渡甚太夫一代記 江戸末期	4	美浜町 川藤甚之助 蔵
11	若狭かれいを制す 2代目広重・版画	1	当館蔵
12	若狭街道の道標 上中町日笠(写真)	1	〃
13	〃 上中町三宅(〃)	1	〃
14	〃 滋賀県今津町保坂(〃)	1	〃
15	〃 京都市鞍馬寺下(〃)	1	〃
16	魚売りカゴ 背負い用・附属品とも 1組	5	小浜市田島 清水善一、音頭ふき
17	〃 担い用・〃 1組	7	〃 山下いよ
18	和紙人形 鯖街道	3体	小浜市 笠原輝華 作 *表紙写真
19	京都寺町今出川の道標 (カラー写真)	1	当館蔵
20	〃 の町並 (〃)	1	〃
21	京都錦小路市場 (〃)	1	〃
22	〃 錦小路店頭 (〃)	1	〃
23	今堀日吉神社文書 条々若州道九里半之事(写真)	1	八日市市日吉神社 蔵 滋賀大学史料館 写真提供
24	日本山海名産図会	5冊	小浜市立図書館 酒井家文庫 蔵
25	〃 鯖鉤図 (拡大コピー)	1	〃 提供
26	拾遺 都名所図会	1冊	〃
27	〃 山端の図 (拡大コピー)	1	〃 提供
	宿場町熊川		
28	熊川山絵図 江戸中期	1	上中町熊川区有
29	諸役免除判物 天正17年・文禄4年 ほか	4	〃
30	御用日記 北方出着荷之覚 ほか	4冊	〃
31	享保十四年覚え書	1冊	〃
32	祭礼山車の見送り 胡人雅話図	1	上中町熊川下の町 蔵
33	里村紹巴 天橋立紀行 (写真)	1	東京大学史料編纂所 提供
34	細川幽斎 玄旨公御連歌(〃)	1	九州大学附属図書館 細川文庫 提供
35	てっせん踊り 唄本 江戸時代	1冊	上中町教育委員会 蔵
	いくつかのサバ街道		
36	洛外図屏風 部分 若狭海道(カラー写真)	1	京都市 中井基次 蔵 京都国立博物館 写真提供
37	若狭敦賀之絵図 正保年間	1	小浜市立図書館 酒井家文庫 蔵
38	サバ街道図示の地図	1	当館作成

みけつくに
御食国若狭

若狭から京都へ魚を運んだ、いわゆるサバ街道は、さらに古くは奈良の都にも達していました。その都、平城京やその前の藤原京の跡から掘り出された木簡の中に、若狭から送られたたくさんの付札があります。これによって、多くの塩が調(土地の特産物を納める税)として、また魚や貝が御贄(天皇のお食事)として、送られたことがわかります。

海の幸の国である若狭は、志摩・紀伊・淡路の国などと共に、「御食国」(天皇の食料を恒常的に献上する国)とされて来ました。平安時代中期に編纂された『延喜式』の中(第三十九、内膳司)にも、「諸国貢進御贄」の記載があり、これらのことがうかがわれます。また、奈良時代には『萬葉集』にも、4首ばかり「御食国」がうたわれています。

奈良の都の跡で出土した若狭の木簡の大部分は「調塩」の付札ですが、これまで「遠敷郡の青郷」(現在の大阪郡高浜町青のあたりと考えられる)から送られた「御贄」としての「多比(鯛)の鮓」・「伊和志(鯛)の腊」・「貽貝」の付札が出て、大いに注目されていました。

所が、最近また平城京の跡から、おびただしい木簡が発掘された中に、多数の調塩の付札と共に、若狭から送られた御贄としての魚貝の木簡が多く発見され、奈良国立文化財研究所から発表されました。それによると、遠敷郡青郷の「鯛」・「鯛腊」・「海細螺」(「しただみ」か)・「鯛鮓」・「貽貝富也交作(鮓)」、遠敷郡木津郷(大阪郡高浜町)の「貽貝鮓」、および三方郡から送られた「宇尔」があります。正に「御食国若狭」の面目が躍如としているといえます。

これらの木簡に見える「腊(きたひ)」とは干物のこと、「鮓」は本来のナレズシのことです。なお、この時代には若狭は遠敷・三方の2郡となっており、大阪郡は平安時代に入ってから、天長2年(825)に、遠敷郡を分割して建てられたものです(『日本紀略』)。



(おおむね原寸大)

写真提供 毎日新聞社
奈良国立文化財研究所許可済

平城京跡出土木簡

(若狭國遠敷郡木津郷御贄貽貝鮓一場)

若狭街道

若狭に通じる街道、特に若狭の小浜と京都を結ぶ主要道路が、一般に若狭街道と呼ばれて来ました。この道を通って、若狭湾や広く日本海でとれたサバ・鯛・カレイなどの魚貝類や、いわゆる北前船（小浜では千石船、または弁才船）から陸揚げされた多くの物資が、都へと運ばれました。また、都の文化が若狭へと伝えられ、この道を通って、人々の親密な交流も行われて来ました。今もその往來を示す昔ながらの道標が、所々の路傍に立っているのを見かけます。

この若狭街道がサバ街道といわれるのは、もちろんここを運ばれた魚貝類の代表名ですが、これに因んで今は特にサバの記録を探ってみました。若狭の浜でサバに一塩して京へ運んだ、とよくいわれますが、江戸時代に書かれた小浜魚市場仲間の仲買文書に、「生鯖塩して荷い、京行き仕る筈に候」という、それにぴったりの記事があります。

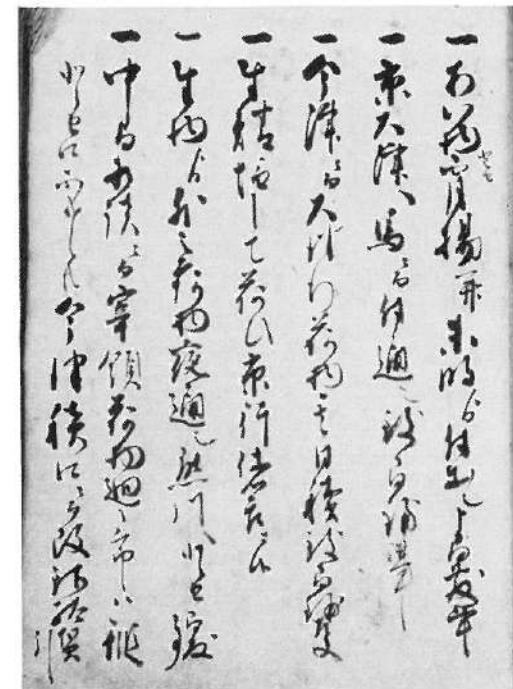
また、京への魚を荷って運ぶ方法として、大坂から来る魚と競争になるので、「近年は時刻を考えて、ここから時々夜通しにでも運んだ」とも書かれています。この仲買文書には、ほかにもサバの記録が多く、小浜の刺鯖・樽鯖などが、今津で船に積まれ、大津その他へ送られたことも見えています。

江戸時代の明和4年（1767）、小浜の町人学者板屋一助が著した『稚狭考』にも、サバ漁の詳しい記述があります。西津小松原などの漁師について、「鯖を釣ること第一の業なり」といい、初めは近くの海で釣っていたが、

段々海上の自由を知り、但馬の経ヶ崎・犬ヶ崎の方まで出かけたとあります。更に近ごろは、能登国に近い海まで舟を浮かべてサバを釣り、富貴になった、とも書かれています。「鯖の多くとれる時は一人一夜に二百本釣り、二宿一船に三千。もっとも大漁なり」とあります。

*

『稚狭考』の30年余り後、大坂の木村兼葎堂の編著による『日本山海名産図会』には、全国各地の名産が絵図と文章で紹介されています。この中には、「若狭鯨」と「若狭小鯛」を挙げ、若狭の「鯨網」および「蒸鯨制」の絵が掲げられています。この蒸鯨についてはその製法と、でき上がったカレイをその日に



▲『市場仲買文書』藤田昭三氏蔵
(4行目、「生鯖塩して荷い京行き仕る二候」)

京都へ運んだことを述べ、その味については「天下の出類、雲上の珍美」と激賞しています。

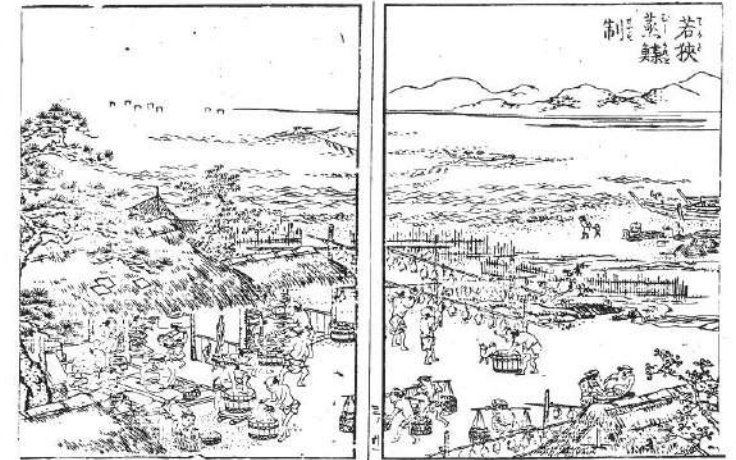
若狭の小鯛についても、蒸鯨と同じく「淡幹」としたものは、その味カレイにも勝るとあり、鯛が古代より若狭の名産品であったことを強く想起させます。サバについては、能登鯖を代表名とし、「丹波但馬紀州

熊野より出す、そのほか能登を名品とす。釣り捕る法、何国も異なることなし」と述べ、鯖釣船が描かれています。若狭の小浜や熊川を経て京都へ運ばれた品物の記録にも、能登鯖の名がよく見られます。

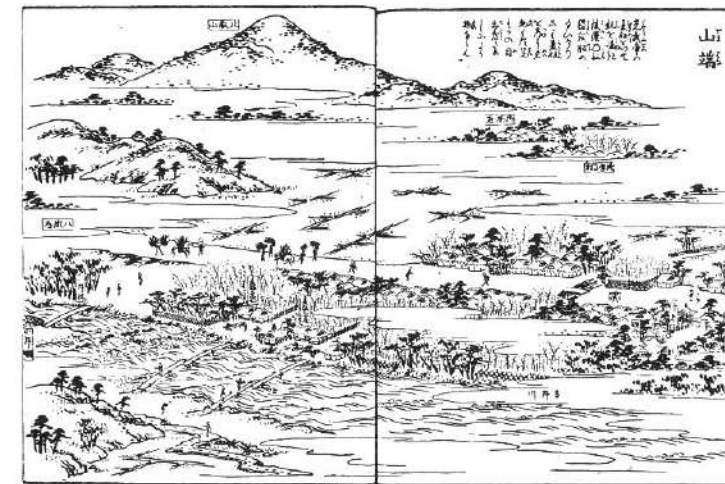
京都の地誌類にも、簡単ながら若狭のことや若狭街道について述べたものがあり、いろいろあります。天明7年（1787）に刊行された『拾遺都名所図会』には、「山端」の所に「修学寺村の西にあり、若狭街道にして八瀬大原の喉口なり」とあり、附近の風景が載せられています。そこには、頭上に柴を頂いて街道を行く大原女や、街道脇に建つ麦飯茶屋（今も国道367号沿いにある料亭）、その水源は若狭なりともいわれた高野川などが描かれています。

若狭の魚を京都へ送ったのは、もちろん小浜からだけではありません。三方郡久々子村

（現在、美浜町）から、生きたウナギを直接京都へ売り、大儲けをした話が、「北前船頭の幕末自叙伝」といわれる『川渡甚太夫一代記』に出ています。彼は久々子のウナギを仲買いし、多くの荷持ちを使って、若狭街道を通りこれを売ったのです。その中には、山端の茶屋のことなども書かれています。



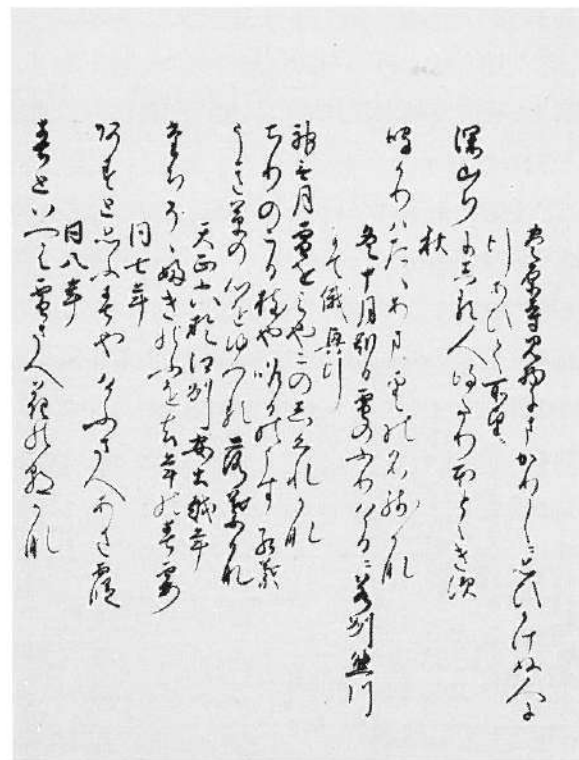
▲『日本山海名産図会』小浜市立図書館 酒井家文庫蔵



▲『拾遺都名所図会』小浜市立図書館 酒井家文庫蔵
(中央を左右に通っているのが若狭街道)

宿場町熊川^{くまがわ}

若狭街道の熊川は、日本海側と都を結ぶ重要な関門の地でした。室町時代には足利幕府直属の沼田氏が、ここに山城を築いています。近世に入ると、浅野長政を始め若狭代々の領主は、諸役免除の政策を取り、熊川の発展を図りました。江戸時代には町奉行を置き、女留関所である番所も置かれました。宿場として大いに栄えた熊川には、今もその当時の多数の古文書が残されており、熊川の代表的な問屋が交替で書いた30数冊の「御用日記」などには、熊川宿で扱われた魚のことも記録されています。また、熊川は交通や商業の要地であるのみならず、当然軍事上の要衝であり、また文化の上でも忘れてならぬ土地柄でありました。室町末期から近世初頭にかけての武将歌人として有名な細川幽齋は、熊川城主沼田光兼の女を正室としています。この幽齋が永禄10年ごろ妻の里である熊川に来て、



▲「玄旨公御連歌」九州大学附属図書館 細川文庫蔵
(この頁中央に「若州熊川にて」の3句あり)

「冬十月朔日雪のふりけるに若州熊川にて俄興行」と題し、「神無月雪をみやこのしぐれかな」「ちりのこる枝や昨日のうす紅葉」などの句を詠んだことが、『玄旨公御連歌』に残されています(玄旨は幽齋の別号)。

また、永禄12年(1569)閏5月には、連歌師の里村紹巴が、京都から丹後の天橋立までの旅行の途中、熊川に来ています。『紹巴天橋立紀行』によると、そのコースは都を出て近江の朽木から熊川に入る、まさに若狭街道そのものを辿っており、「笠二本打ち忘れけり雨降らず照る日もささぬ若狭路の空」という歌をも詠んでいます。

時代は下がりますが、熊川には大正の初めころまで、「てっせん踊り」という優雅な民踊がありました。盆踊り

のときなど、町の盛り場ともいべき街道の広場や寺の境内で、毎夜のように踊り続けられたといいます。この踊りも、古く若狭街道を通して京都から伝わったものです。また、江戸時代から熊川の氏神白石神社の祭礼が盛大に行われ、3基の山車が出ましたが、それぞれ京都から購入して用いられて来た西陣織綴錦の豪華な見送り幕が、今も大事に保存されています。

いくつものサバ街道

若狭街道の中で、小浜から熊川・保坂・朽木を通り京都に至る道が、最も多く利用された道のように見えます。小浜から遠敷・根来を通り、針畑(滋賀県朽木村小入谷のあたり一帯の称)へ越えて南下する道も、主要な若狭街道の一つでした。針畑では「これが一番古いサバの道や」といわれ、「千二百年も昔の、京へ、夜さり(夜)、魚を運んだ、ということや」といわれて来たそうです(『朽木の昔話と伝説』)。

また、小浜から熊川・保坂を経て今津に至る道は、「九里半街道」とも称され、この街道を往来して商売に従事した近江商人に関する資料が、八日市市今堀の『日吉神社文書』の中にあります。『延喜式』(巻二十六、主税上)によると、若狭から都へ官物の米などを送るとき、近江の勝野津(現在、高島町)まで陸路を行き、ここから海路を大津まで運んだことが記されています。その後、平安時代中期から木津(現在、新旭町)、鎌倉時代以降は今津から、湖上を物資が運ばれています。

小浜周辺には、「京は遠うても十八里」という言葉が伝えられており、江戸時代の若狭の地誌や室町時代の文芸の書にも、小浜から京都までは十八里と書かれています。今も、若狭から針畑越えをして京都に至る道の中程にある小川(朽木村)では、「小浜へ八里、京十里」という昔ながらの言葉が聞かれます。この小川から京都へ行くのにも、現在大津市の梅ノ木へ出て大原・八瀬と進むコース、京都府の久多を経て鞍馬を通り京に至る今なお若狭街道と呼ばれるコースもあります。

江戸時代に描かれた京都の「洛外図屏風」の中に、北区の雲ヶ畑を通る山間の道を「若狭海道」と標示したものがあり、これは小浜から名田庄村の染ヶ谷などを経て、京都に通じている道と考えられます。『稚狭考』(第五、散楽祭礼)には、小浜より京へ行く道として、名田庄の知井坂を越え、丹波の周山を経て行く道を始め、琵琶湖の西岸を通る道なども挙げています。

このように、そして、これ以外にも、若狭と京都を結ぶ道は、昔から幾通りもありました。「サバ街道」という名称は恐らく新しいと思われるかもしれませんが、これら多くの道が、若狭から魚も運ばれた事実上のサバ街道であったことを、道路沿線各地の人々が、今も親しみをもって語り伝えています。



▲道標 滋賀県保坂
(右京道、左わかさ道)

サバ街道 略図

若狭からサバなど魚貝類を運ぶためには、昔からいろいろな道が利用されました。下記(太いルート)以外にも、もっとあったと考えられます。更に詳細な調査が必要です。

